



Title	津曲先生を悼んで
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 特別号, 163-171
Issue Date	2022-03-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/84923
Type	bulletin (other)
File Information	10_Kazama.pdf



[Instructions for use](#)

津曲先生を悼んで

風間 伸次郎
(東京外国語大学)

以下乱筆乱文で、読み返すと「(津曲)先生」と呼んだり、「津曲さん」と書いたりしている。読者にお許しを乞うとともに、天国にいる津曲さんに謝りたい。

1. 助手時代

1.1. 北大言語の助手に

津曲先生は1951年に福岡県にお生まれになったが、小さい時にはもう札幌に移っていたと聞いた。「津曲」姓は鹿児島姓だが、とても珍しく、先生の親族のみだそう。いつか先生がある時ホテルに泊まると宿帳に同じ姓を発見したので、会って話してみたらやはり親戚だった、という話をしてくださった。

津曲さんが北大に入った頃は、学生運動の終わった後だったという。北大で移行(2年秋に研究室を選んで入ることを北大ではそう呼ぶ)のガイダンスの時に、池上二良先生が日本語の音素 N の逆行同化による異音の話を書いたのを聞いたのが言語学科に進むきっかけだったそう。修士論文は満洲語の **Switch reference** に関するもので、これは北大で言語学会があった時(1981年秋)に発表なさっている(私はまだ高校生の頃だ)。学会の HP で確認すると、発表者は全部で13人、会場はまだ1つで、今とは隔世の感がある。切替さんによると、発表には厳しい質問があり津曲さんはあまり納得のいかない様子だったという。

1976年に修士を修了し、翌年博士後期課程に進んだが、わずか一年でこれの中退して研究室の助手になっている。このことから如何に当時すでに津曲先生が賢く、将来を期待されていたかがわかる。助手時代には、モーラ概念を導入してウイльта語のアクセントの体系を解明している。

1.2. 北大言語の思い出

筆者が大学の3年生になり北大の言語研究室に入った時、先生はその研究室の助手であった。津曲先生は実に10年以上にも亘って助手をされた。チュルク諸語の泰斗である庄垣内先生も長いこと助手をなさったそうだが、津曲先生に「津曲はんにはかないまへんわ」とおっしゃっていたのを横で聞いた記憶がある。筆者が北大言語に入ったのは、池上先生退官の翌年で、宮岡先生が赴任されたのはさらにその翌年だった。つまり一年の空白期間(?)があつて、私たちの世代は「戦争を知らない子供たち」などと呼ばれていた。

当時、先生が卒業論文の書き方などというものを指導してくれることはなく(今でもたいていそうなのかもしれないが)、助手がもっぱら学生たちの相談に乗っていた。先生が4回にわたって研究室日誌に連載した「泥縄式卒論の一考察」という記事は簡潔にして要を得たもので、長く読み継がれている。しかし『津曲敏郎先生古希記念集』において活字化するこ

とになろうとは、当時の誰一人思いもしなかったことだろう。今になってまた読み返してみると、今の自分が学生に言っていることばかりだ。「マエフリ」をしろ、というのもその一つだ（長い章ではその章の構成などを先に書け、というやつである）。私の文章にカッコ書きが多いのも、泥縄式に「註が多すぎると読みにくい」と書いてあるのが一つの原因だと思う（言い訳か!?)。

部屋そのものは現存しているものの、もう「北大言語」の部屋ではなくなってしまった文学部のあの4階の部屋が今ではたまらなく懐かしい。筆者が移行した時、一番奥に津曲助手の机があり、その一つ手前に札幌方言をやっていた尾崎さんの机があった。尾崎さんが何度も録音を聞き返すので、レコーダーの「ボタンが埋まってしまった」んだとか、尾崎さんが一時間もかけて自転車で方言調査に行き帰って来たので「どうだった？」と訊いたら、「不在だったんです」と言ったとか、そんなエピソードを津曲さんがおもしろおかしく話してくれたことを思い出す。

私はすっかり研究室に入りびたりとなり、誰もいないと先輩や津曲さんの本棚にある本を読んだものである。遠藤さんの本棚には『軽井沢シンドローム』というマンガがあったのももちろんまずそれを読んだが、助手の椅子に座って(!)、小泉保の『教養のための言語学コース』を読んだことも思い出す。当時はまだ東大出版会の『言語学』もなく、田中春美『言語学のすすめ』だったか、入門書にはそんなのがあったが、私はちっとも読む気がしなかった。上記の小泉の本は今見るとちょっと「あざとい」感じだが、当時の私には読みやすかった。

ある日のことである。英語学概論の授業で「英語はかつては屈折的な言語だったので、sing-sang-sungのような母音交替があるが、日本語は膠着的なタイプなのでそんなものがない」というような話を聞いた私は「待てよ、kan-kanamono, hun-hunayado,... おお日本語にも母音交替があるじゃないか！」と喜び勇んで研究室に行き、津曲さんに報告した。すると津曲さんは笑いながら「バカもん、そんなものはとっくに発見されとるわい、これでも読め」と被覆形と露出形というものを教えてくださった（思えば自分の苗字 (kaze-kazama)にあるものを、我ながら気づくのが遅すぎる！)。授業で一方通行に聞いた話はみんな忘れてしまったが、こんな風に助手の津曲さんから生きた言語学を教わっていたものだった。

今思えばその翌々年から中国に現地調査に行く準備だったのだろうと思うが、帰国子女の美しい女性に頼んで、津曲さんを中心に週1回、中国語会話の勉強会をやっていた。私もそこに参加させてもらった。大学の授業というものはいい加減にしか聞いていなかったが、何しろ助手の人がお金も払って勉強している会に参加させてもらうのである。私はそこで初めて単位のためでもなく成績のためでもなく、本当に勉強したいから勉強する、という機会に直面した。なぜだか津曲さんや匹田さんと（佐藤さんも一緒だったか？）*Jazyki narodox SSSR* のニブフ語の記述をロシア語で読んだこともあった。当時の私はロシア語なぞ一つもやったことがなかったので、何時間も掛けて最初の一行の予習をし、私の訳は一瞬で終わり、あとは先輩方がその先を訳していくのを聞いていたものである。語形変化がわからない上に（キリル文字からしてわからないのだが）、ロシア語は冠詞が無くて語順も自由なので、最初はどれが名詞でどれが動詞かさえわからなかった。

まじめな話(?)を書いてしまったが、当時の北大言語は私以上に(?)ハチャメチャであった。先輩たちは強力で、その武勇伝はよく切替さんや佐藤さんから聞かせてもらっていたものだ。そもそも切替さん自身が大物中の大物で、文学部の事務の会計課の前には授業料未納者の名前が貼ってあったが、一番上に書いてある切替さんの授業料はとても安かった(入学年度が早かったからだ)。本当かどうか知らないが、切替さんは移行の際に授業料の他に「移行料」がかかると親に言ってお金をゲットしたんだそうだ。私の同期の者たちもなかなか強者だった。1コ下の新歓だったか、竹内というやつが津曲さんになみなみとビールを継いだコップを渡すと、やおら座布団を取り上げて津曲さんの前に掲げ、「あら不思議、ここにありますこのお酒、あつという間に消えてなくなります、津曲さん、どうぞ!、チャラララ~(El bimbo)」と始めたのである。津曲さんはのちのち「まったくあの竹内めが、、、」とか「悪魔のイントロ」などと言っていた。皆記憶をなくし、靴を片方失くしたりして、スキノのその夜は更けた。北大言語でもよく飲んで、飲み屋の予約の木の板に「北大言語御一行様」と書かれたヤツを誰が失敬してくるんだかわからないが、いくつもそれが研究室の入り口の前に並んでいたという時代だった。

北大言語は「文学部ソフトボール大会」にも毎年参加していたが、何しろ女の子の多い言語学科である。せいぜい1回勝つのが関の山で、日本史や国文に常に苦杯を舐めていたものである。私が移行した頃は津曲さんも出場していた。アルバムには津曲先生の打席での懐かしの雄姿が残っている。その後男子学生が多い年もあり、幸か不幸か宮岡先生のおかげで(?)多くが留年したためメンバーは充実し、私が院生の時、北大言語は初めて優勝した。文学部前の芝生でビールかけをしたものである。その芝生も今は自転車置き場になっている。

そうこうしているうち、筆者も卒論提出の時期となった。まだワープロが出たての頃で、3.5インチのフロッピーに数ページ分の情報しか入らない、なんて時代だった。私と、同期の佐藤君は提出日の夕方も言語研究室で卒論を書いて、「できた~」などと言っていると、津曲さんが「おまえさん表紙というものはつけないのかい」と言うので、初めて表紙というものが要ることを知った。たしかそこで津曲さんと匹田さんが手伝って表紙を作ってくれたように記憶している。「今度こそできた!」と思って佐藤君と出しに行こうとしたら、院生(当時)の佐藤さんがワインを2杯注いで持って来て「これを飲んで行け」と言う。何だかわからないが二人で飲み干して1階の事務に出しに行った。階段の途中で、なぜかそこで書いているヤツを見た。17時に事務のドアが閉まると終わりである。16時45分頃だった。アメフト部のやつが事務のドアが閉まらないよう、後輩たちにドアを押さえに行かせていた。なんとか卒論を出すと、津曲さんは同期の者たち6人を御自宅に招いて祝ってくださった。佐藤さんのいう「白亜の豪邸」である。なぜかFinlandiaというアルコール度数40%のウオッカが出てきて、同期の女の子に注がれると、私は自信たっぷりに一気飲みしたが、さあそれからの記憶がない。目覚めると翌朝、新聞紙の上に寝ていた。白亜の豪邸の美しいトイレにも粗相をしたらしい。津曲先生の退職記念の会でもこの話をしたが、いよいよそれから全く私は津曲先生と奥様には足を向けて寝れなくなってしまったという訳である。

2. 助教授・教授時代

2.1. 中国への調査

その後津曲先生は1988年に小樽商大助教授となり、1996年には教授となり、これを経て1998年には教授として北海道大学に戻られる。小樽商大助教授となった1988年は、先生が初めての国外現地調査（中国東北部ホロンバイル地方、対象はソロン語）に赴いた年でもあった。先生はそれまでも日本国内でダグール語やウイльта語の調査を行っていた（これはのちに2003年のRoutledge刊のDagurにつながる）。当時大学院に入った筆者はこの中国での調査に同行させていただいた。7月8月、内蒙古の街ハイラルや南屯のホテル／招聘所で、私は先生とずっと一緒に過ごした。一緒に行ったモンゴル人の研究者をはじめ、中国の人々は大量の御飯を食べ大瓶のビールを飲んで昼寝してしまうのだ（中国のビールはビンごと随分と量が違うのがおもしろかった）。なかなか村などへの調査には入れず（入らず？）、私と津曲さんも仕方なく（？）その風習に従い昼寝した。ホテルのベットの枕元の電灯の笠をゴールに見立て、軍手を丸めたものを投げて遊んでいたら、津曲さんが参戦してきて一緒にやったのを思い出す。

その時初めて言語調査ということをしたのだが、それはいわゆる基礎語彙調査というものだった。単語を媒介言語で訊いてそれを音声的な表記で書き取って、音素体系を考えるわけだが、思えば当時の私は音韻論というものさえ碌々わかっていなかった。調査して「ニャ」と聞こえる音が出てきたので、私はnjaと書いていた。ところが津曲さんの書くのを盗み見するとjaと書いているではないか。「どうしてこう書くんですか」と訊くと「kjaやmja, hja, rja..,」などが並行して存在するならそれもありだが、ニャしかないなら、音節構造を複雑にすることなく、子音を1個立てるだけで済む」というようなことを教えてくださった覚えがある。ニャという同じ音声を聞いても、全体の体系を考慮して/p/と解釈することもあれば、/nja/や/næ/と解釈することもあり得るわけだ。そもそも「音素」というものは解釈して得るものだ、とか、全体（体系）との関係でつかむものだ、ということもその時になって知った（「音素」もわからずに大学院に受かってしまって入学していたんだから、我ながら全く困ったものだ）。かくいう津曲さんも、例えば『言語学大辞典』の「ナーナイ語」の音素を /p, t, k, b, d, g, č, j, m, n, ŋ, η, .../ と書いているが、上記の考えを推し進めて行けば、/p, t, č, k, b, d, j, g, m, n, ŋ, η, .../ と書きたいところで、最近の私はそう書いている。結局何の目的でどういうレベルの音韻論にするか、という問題だが、ある意味、今になっても「音素」が何なのか、よくわかっていないのかもしれない。こうしたことについてもう津曲さんと話ができないのか、と思えばやはり寂しい。

津曲さんは「こいつは野球部で体力があるから、荷物担ぎにはもってこいだ」と思って私に声を掛けた、と言っていたし、私も「まかしててください！」と言っていたのだが、私は現地で体調を崩してしまい、元気が売り物どころか病気で御迷惑をかけるハメになってしまった。ハイラルから南屯の招聘所に移っていたが、夕方は皆でその頃中国のテレビでやっていた山口百恵の「赤い衝撃」を見た。全部早口の中国語なので、中国語学が専門の谷野さん以外みんな話がどうなっているのかわからず、友和の父親が何か言うと悲しい音楽に変わるので、「ああ、何かとんでもないこと言ったんだな」と思うのだった。

2.2. ロシアへの調査

調査は科学研究費によるもので3年の予定であったが、翌年6月に天安門事件が発生、調査地はロシア極東に変更され、89年、90年にはハバロフスク周辺でナーナイ語の調査を行うことになった。急な変更だったためかロシアに行けたのは12月で、夏休みは札幌にいた。この時、津曲さんは私を誘ってナーナイ語の勉強会をしてくださった。毎日ロシア語を読んだりナーナイ語を読んだりするのだが、これは私にとってはすごく勉強になった。「午後の紅茶」の1.5L入りペットボトルを買って来て、二人でコップに注ぎながら汗を拭き拭き読んだことを思い出す。何しろちょうどその前くらいに、先生は一連のツングース諸語の記述（12言語）を執筆し、88, 89, 92年刊の三省堂の『言語学大辞典 1-4 巻』に発表されている（他にもツィンツィウスをはじめとする主にロシアのツングース語研究者など8人について解説を記している）。主に *Jazyki narodov SSSR* を読んで書かれたものと思うが、そのタイミングで津曲先生と夏休みいっぱいじっくりと勉強会ができたのは私にとって幸運なことだった。先生御自身にとっても、ここでツングース諸語の全体像を把握したことが90年の「ツングース諸語の類型と相違」に結実している。この頃は私に小樽商大のLL教室のアルバイトも紹介して下さい（ほとんど何もしないで座っていればいい仕事だった）、帰りはいつも車で送って下さった。

初めての冬のロシアでは部屋は別だったし、授業の関係で津曲さんは先に日本にお帰りになったので、むしろ佐々木さんや小長谷さんとの思い出の方が勝っている。思い出すのはあの時のことだ。料金が高いというので我々はインツォーリストホテルからガスティーニツァ・ツェントラーリナヤに移った。でかけるのにいちいちフロントに預けるなんて面倒くさいので、我々は皆でっかい靴ペラのようなプラスチックのついた鍵を持って出かけるのが習慣になっていた。引越しが終わり、新しいホテルのフロントの前でもらった鍵をポケットに入れようとしてハッと気が付いた、インツォーリストの鍵を持って来てしまった！隣にいた津曲さんに怒られるだろうか、それとも「バカだなおまえは」とあきれられるだろうか。「しまった、これ持って来ちゃいました、」と言いつつ、ポケットから出した鍵を見せた。ところが「フフフ」と笑うではないか。そして津曲さんもおもむろにポケットからインツォーリストの鍵を出したのであった。

90年夏に行った時には、ハバロフスクで池上先生やR. アウステルリッツ（ニブフ語の著名な研究者）とおち合った。津曲さんからアウステルリッツについて聞いた話を紹介しておこう。「アウステルリッツっていうのが、これがまたキザな男でねえ、何か国語もできるんだけどさ、ある時池上先生が『あなたはいったい何か国語話せるのですか？』と訊いたんだ、そしたらほれ『私は2つの言葉しかできません、花の言葉と、愛の言葉です』って、な～に言っただか。」

91年には津曲さんが中心となり、上記3年の調査報告書『ツングース言語文化論集1』を刊行した。その後このツングース言語文化論集は津曲先生や筆者によって精力的に刊行が続けられ、2022年現在で70号を数えるに至っている。これとその前に出た『ソロン語基本例文集』（朝克・津曲・風間（共編著））の作成過程を傍らでみていたことはやはりすごく勉強になった。形を整えて成果として世に出す、ということがどういう作業なのか、よくわか

った。すでにいろいろな方が書いているように、こうした編集作業などにおける津曲さんのバランス感覚にはきわめて優れたものがあった。

一方、宮岡先生の先導のもと、1990年には北大で第2回北方言語研究者協議会が開かれ、これは『北の言語 類型と歴史』(1992年)に結実する。この本に収められた津曲先生の「所有構造と譲渡可能性」は後進の研究者に多くの影響を与えている。正直、当時の私は「所有構造なんて、『AのB』でおわりじゃねえか、なんかおもしろいことがあるのかよ!?’」と感嘆していただけに衝撃は大きかった。

その後津曲先生は中国のヘジェ語の現地調査に一度赴いた後、1996年に初めてロシア沿海州ビキン川沿いのウデへの村クラスヌイ・ヤールを訪れた。ここでアレクサンドル・カンチュガ氏と出会うこととなった。カンチュガ氏は自身のライフヒストリーをロシア語とウデ語の両方で書くことができたので、津曲先生はその後実に20年にわたって毎年この村を訪れ、カンチュガ氏から少しずつテキストを引き出して行った。その成果は13冊になり、ツングース言語文化論集の中で大きな位置を占めている。ボアズ以来その重要性が指摘されていたことだが、津曲先生も話し手自身にその言語の資料を記録してもらうことの大切さを説いていた。2000年代は津曲先生と私で競うようにツングース言語文化論集を刊行した。これも私にとって大変な励みであったことは言うまでもない。

2.3. 大脱出

津曲先生と御一緒したなかでもっとも印象深いのは何度にも亘るこのクラスヌイ・ヤールへの調査行である。狩猟民族ウデへの村ヤールは山の上であり、特に春休みの調査は寒く、「う～さぶ」と言って外から戻って来る津曲さんの声を今も思い出す。ペレストロイカ後のロシア経済の混乱はまだまだ回復しておらず、極東のこの村にはしょっちゅう電気がなかった。あっても夜の8時から12時までだった。小さな部屋の1つの机をはさんで二人で資料を整理していると、12時になりノートPCどころか部屋も即、真っ暗になってしまう。なぜだか真冬でも部屋にはテントウムシがたくさんいて、たまに寝ている顔の上に落ちてくるのだった。なかでも一番の思い出は1997年3月30日、私が「大脱出パート1」と呼んでいる事件(?)だ。3/20にヤールに入り、調査も無事終わった。津曲さんの帰りの飛行機は3/31だったので(私はさらにナイヒンに行ってナーナイ語を調査する予定だった)、3/30朝10時にヤールを出発した。しかし3日前から雨が降り出し、その後雨は重たい雪に変わり、30日にも雪はこんこんと降り続いていた。一方、村でやっとチャーターできたのは地球を2周半もした走行距離を示している日本の中古車カーリーナだった(交通機関などというものはない)。まあ車種や走行距離はともかく、こういう場合とにかく車高の高い4輪駆動の車でないとどうにもならない。車はまるで深い雪の中を泳ぐようだった。ふだんなら5時間も走ればハバロフスクに着くが、何度も雪に嵌り、タイヤは空回りを繰り返す。ちょっと上り坂にさし掛かればもうにっちもさっちも進まない。数kmも進まないうちにあっという間に日は暮れる。夜じゅう車を押す羽目になった。トラやヘラジカの住む森は真っ暗で、車のライトだけが闇に浮かび上がっている。飯はサーラ(塩漬けの豚の脂身の塊)とウオッカだった。夜明け過ぎやっと下流の街へ出る。今度はツルツルに凍った舗装道路を時速40kmで行く。運転手が寝ないよう、助手席でずっと歌を歌った。飛行機の離陸時刻は14:10、

空港はまだ 240km も先だ。13:40 到着。運転手にお土産を渡している津曲さんを横目で見つつ、ダッシュで出発カウンターへ。「もう搭乗手続きは終わった」という空港係員に必死のロシア語で食い下がり、なおもイヤミを言う係員を説き伏せてやっと津曲さんを乗せたのだった。

2.4. 津曲先生の教育

1999~2002 年度に宮岡先生代表の科研費特定領域研究「環北太平洋の消滅の危機に瀕した言語にかんする緊急調査研究」（略称 ELPR）が行われたが、これに先立つ 94 年に『環北太平洋の言語』／英文編 *Languages of the North Pacific Rim* が宮岡先生によって創刊された。津曲先生はこのうち 3 号を宮岡先生と共同で編集し、7 号（2001 年）から 15 号（2008 年）まではお一人で編集された。2011 年に津曲先生はこれを継ぐものとして『北方言語研究』を創刊され、その編集を続けて来られた。その後 2019 年には日本北方言語学会が設立され、編集業務は学会の仕事となったが、津曲先生は顧問としてそのバックアップに当たられた。『北方言語研究』は 2021 年現在 12 号を数えている。上記の研究会、研究紀要、学会は多くの北方言語研究者を育んだ。

御自身は 2002 年に大学書林から『満洲語入門 20 講』を刊行し、自身の満洲語研究にもけりをつけた。これは言語学的に精緻な記述であるとともに、一般の人にもわかりやすく、簡潔にして要を得ていて、啓蒙書としても大きな意義を持っている。2003 年には北海道立北方民族博物館友の会『アークティック・サークル』に連載された自身を含む 18 人の北方言語研究者のエッセイをまとめた『北のことばフィールドノート』を編集している。

上記のような研究活動のかたわら、津曲先生は多くの後進を育てた。博士号を取得した者だけでも、アリュートル語を専門とする永山ゆかりさん、ブリヤート語をはじめモンゴル諸語を専門とする山越康裕さん、オーストロアジア語族のワ語を専門とする山田敦士さん、アイヌ語を専門とする矢崎春菜さん、ウイルト語を専門とする山田祥子さん、ツングース諸語を中心に言語接触の問題を広く扱っているベック サンヤップさん、といった方々である。指導教員でなくとも、さらに助手時代をはじめ直接間接にその教えを受けた者はかなりの数に上るだろう。筆者ももちろんその一人である。ある時ロシアの研究者から、「おまえは日本のツングース諸語研究における *nauchnyj vnuk (scientific grandson)* だな」と言われたことがある。池上二良先生が第一世代、津曲先生が第二世代、というわけである。しかし筆者はまだその第四世代を育てていない。2009 年、筆者は金田一賞を受賞することができたが、その授賞式には恩師を呼ぶことができた。この時はほんのちょっとだけ、恩返しができたかなあと思っている。授業のことなどもいろいろ訊いたり、ヒントを教えていただいた。津曲さんが非常勤先の札大で自分の作った言語の分析を学生にやらせている、というのを聞いて、私も作ってみよう！、と思った（今も学生たちにやらせている）。津曲さん自身はライアンズの『言語と言語学』に載ってたボンゴボンゴ語を参考にしたんだ、と言っていた。

3. 私からみた津曲先生

先生は 2011 年からは北海道大学総合博物館の館長も兼務された。そして 2015 年の退職後は網走の北海道立北方民族博物館の館長となった。そもそも 1988 年の最初の現地調査の

際に、先生は北方民族博物館の開設のための資料収集の任務を負っていた。そして1991年には北方民族博物館の資料収集評価委員となっている。このように津曲さんと博物館の関係は深く、危機言語に関して、言語の研究と共に文化や生業の研究が重要であることを早くから認識されていたようだった。その民族の生業体系が破壊されることは言語の衰退にも直接つながっているのである。

みなさん御存じのように、津曲先生は優しく温厚な方であった。助手時代が長かったからかもしれないが、自分の研究を支えてくれる人々への感謝の気持ちを常に忘れることがなかった。まだ院生になりたての頃、私が他の研究者から抜き刷りを送っていただいたのを読んでいると、私は先生に「受領のお礼の手紙を出したのか」と訊かれた。「ちゃんとお礼を出さないと、次からは送ってもらえないよ、」といつになく厳しい口調でおっしゃった。それ以降はその教えを大切に、ちゃんと返事を出すようになった。その後自分も人に研究成果を送ったりするようになったが、興味深いことに立派な成果をあげている偉い先生ほど必ずきちんと御返事を下さるものだと知った。研究者である以前に、人間として大事なことを折りに触れ教えてくださったことに、改めて深く感謝している。

そして津曲さん自身は何より自分の師・池上二良先生へのなみなみならぬ敬意と感謝をお持ちだった。それは池上先生の一連の著書についての書評論文を読んでもわかるが、先生に身近に接していた筆者がもっとも強烈に感じていたことでもある。

先生は気配りに優れ、組織の運営や研究においても優れたバランス感覚をお持ちの方だった。そのことは上記のような研究紀要の編集や、音韻体系の精緻な記述などからも理解していただけるだろう。私は音対応に基づくツングース諸語の分岐についての通時的研究については何度か書いたが、共時的な音韻体系についての論文を書くのは苦手だった。津曲さんは逆だった。音韻論というものは、あっちを立てればこっちが立たずで、その音韻論の目的にも依るし、音節構造が簡単な方を探るか、母音目録が少なくて済む方を探るか、みたいなことになりがちである。ある時、調査で一緒した時に「比較言語学は将棋やってるみたいで、音韻体系の設定はマージャンやってるみたいですね」と言ったことがある。津曲さんの答えは忘れてしまったが、世代だからか、よくマージャンの話をした覚えがある（マージャンのお相手をしたことは一度もなかったのだが）。

いつも眼鏡の津曲さんだが、長い時間を一緒に過ごしているとたまに眼鏡をはずしたお顔をみることがある。目の悪い人に多いと聞かすが、その目は少女マンガに出て来るような長い睫のキラキラした大きな目で、えらくイケメンである。退職記念会の2次会もカラオケだったが、津曲さんはカラオケ好きだった。黒田先生たちと科研の飲み会に行った時、あれはススキノのスナックだったろう、松山千春の「銀の雨」を歌われたがそれはそれは上手だった。うらやましいやら何やらで、私もすぐ次に千春の「季節の中で」を歌ってみたが、こちらはちっとも冴えないのでがっかりした。学部時代はクラシックギターをされていたと聞かすが、こちらもついにその演奏を聞かせていただくことは叶わなくなってしまった。

90年代に一緒に現地調査した折に、先生は自分は心臓があまり強くないこと、北大の教授の職を早期に退職することも考えているというようなことをおっしゃったので、とてもびっくりした。津曲先生の亡くなった2020年11月7日は、池上先生の生誕100周年を記念する第3回北方言語学会開催の日であった。偶然とはいえ、まるでこの日を選んで旅立た

れたような気がしてならない。しかしあまりに早過ぎて、未だに信じられない。この文を書くにあたって、古いメールを見返したりしていたら、今にも津曲さんからメールが来るように思えてならない。

思えば自分のがさつで感情的で、落ち着きもなく思い込みも激しい人間である。津曲先生が先生でなければ、とてもまともにはやって来れなかつただろう。運命に感謝する他ないが、それにしてもこの世にまさしくたった一人というべき師に巡り合えたことの幸せを感じる。

今頃は切替さんと「あれ、おまえなんでこんなところにいるの?」「いや津曲さんこそ」「さあ、池上先生に御挨拶に行くぞ」「ええー、ボクちょっと、やだなあ…」などと話しているのだろうか。

謹んで先生の御冥福をお祈りする。